

講演 2

16:40~17:10

がん撲滅を目指した新たな免疫療法の開発

講師 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 理事長 中村 祐輔 氏



1977年 大阪大学医学部卒業
1994年 東京大学医科学研究所教授
2005年 理化学研究所ゲノム医科学研究センター長（併任）
2022年 国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 理事長

2018年 東京大学名誉教授、シカゴ大学名誉教授

2003年 紫綬褒章
2021年 文化功労者

(講演内容)

ゲノムやさまざまなオミクス技術の進歩に伴い、多種多様な病態や薬剤の応答における免疫細胞の変化を詳細に追跡することができるようになり、種々の薬剤による重症の薬疹や肝傷害や自己免疫疾患の原因が明らかになってきた。また、がん治療においては、がん組織内や全身の免疫環境が、がん免疫療法だけでなく、抗がん剤・分子標的薬・放射線治療の反応性においても重要であることがわかってきた。患者の体内でがん細胞を攻撃する免疫力を高める新たな免疫療法の開発が進んでいる。がん患者で起こっている複雑な免疫反応を紐解きながら、新しいがん特異的免疫療法の開発について紹介したい。

17:10~17:20

休憩

講演 3

17:20~17:50

がん治療の革新—イレッサから始まる次世代治療の展望(仮)

講師 近畿大学病院 がんセンター センター長 中川 和彦 氏



1983年 熊本大学医学部卒業。熊本大学医学部附属病院、国立がんセンター、Medicine Branch、NCI、NIH などを経て、
2007年 近畿大学内科学腫瘍内科部門教授

現在 近畿大学附属病院がんセンター長
認定 NPO法人 西日本がん研究機構 (WJOG) 理事長

(講演内容)

がん治療は、これまでの標準治療に加え、分子標的薬や免疫療法など、新しいアプローチが次々に登場しています。中でも、肺癌治療における分子標的薬「イレッサ」の登場は、がん治療の転換点となりました。イレッサは、EGFR(上皮成長因子受容体)遺伝子の異常を持つ肺癌に対し、画期的な効果を示しました。この治療法は、従来の化学療法とは異なり、がん細胞の特定の分子をターゲットにすることで、副作用を抑え、より効果的な治療が可能となりました。本講演では、イレッサがもたらした治療の革新を振り返りつつ、現在の分子標的治療の進展とその課題を解説します。また、次世代のがん治療として注目される免疫療法や、遺伝子編集技術、さらには個別化医療の未来像についても触れ、今後のがん治療の可能性と展望を示します。がん患者に対する治療選択肢が広がる中で、治療法の選択と患者一人ひとりに最適な治療を提供するためのアプローチの重要性のお話をさせていただきます。

17:50~18:00

閉会の挨拶

サラヤ株式会社 代表取締役社長
一般社団法人生産技術振興協会 常務理事

更家 悠介